

グリザイアの星霜

Roterose

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

もしも「滝園学園マイクロバス転落事故」での一件で風見一姫が生きていたらというifの物語です。

周防天音と共に救出された一姫は、頭部へのダメージにより目を覚ますと記憶を失っていた。

日下部麻子と弟・風見雄二との山小屋での3人暮らし……美浜学園での生活……

もう1つの一姫の物語としてお楽しみください！

雄二視点の『黒薔薇の檻』も連載中です！
<http://novel.syose>

t
u.
o
r
g
/
4
8
0
1
0
/

目次

本編

プロローグ	1
第一話「私のいた世界」	5
第二話「壊れ行く日常」	9
第三話「闇夜の中で」	18
第四話「人の形」	23

本編

プロローグ

「かず……かず……ねえ、かずき……一姫い……」

熱い、ここはアスファルトの上？ 私達は遭難して……

「ねえ起きて、起きてよ一姫い……」

親友の周防天音すおうあまねが、泣き声で揺さぶってくるのが分かる。

体中が痛い、起き上がるのは厳しいようだ……

「あ……あ、天音……無事でよかったわ……」

何とか声は出すことが出来た。

「私だって心配したんだから！ 道路が見えてから倒れちゃって……」

「ごめんなさいね……つつ、しばらくは動けそうにないわ。」

「無理しないで、ところで私達助かったんだよね？」

「ええ、助かったの、生き延びたのよ……」

「怖かったよ一姫いグスツ、もう帰れないかと思ったんだからあ」

「でも完全に助かったとは言いがたいわ、何とかして助けを求めないとね。」

「うん、そうだね」

マイクロバスが転落してからの永遠の時間のように感じられた、あの地獄のような日々から抜け出すことが出来たのだ。やっと帰れるのだ、親愛の弟である風見雄二の元へ……その時は、一緒にお風呂に入って体を洗って貰おう。

頭が痛い……きつと助かったから多くの事を考え過ぎてしまったのだろう。

「あつ車が来たよ、やったよ一姫助かったんだよ。」

「ええ……そう……ね……」

「一姫？もう大丈夫だよ一姫？ねえ一姫、かずきいいいい……」

そうして私、風見一姫の意識は途絶えた。

「……………」

目を覚ますと私はベットの上にいた。頭がひどく痛む。ここはどこだろう？なぜ私はここに？そもそも私は誰？

「姉ちゃん！」

「一姫、よかったお前がいなくなると私達は……」

「母さん心配だったのよ……」

この人達は誰なのだろう、なんで泣いてるのだろうか……

「一姫……？それは私の名前かしら？」

「ねえ……ちゃん？」

「私はあなたの姉なの？ごめんなさい、思い出せないの、何もかも。」

「早く先生を呼んでくるんだ！」

「一姫い……一姫い……」

「嘘だろ？姉ちゃん！俺だよ雄二だよ」

「ごめんなさい……」

「風見さん大丈夫ですか？やはり頭部にダメージがありましたか……」

その後の精密検査によると、どうやら私は記憶を引き出す領域が損傷していて、知識としての記憶は引き出すことができるが、思い出としての記憶が引き出せない状態のようだ。

「一姫に掛けてきた期待は何だったんだ……」

「あなた……」

私は期待されていたのだろうか？なら好都合だろう、期待される人生ほど生き辛いのは無いのだから。

「姉ちゃん……姉ちゃん……」

雄二だったかしら、私の弟らしいけど思い出せない。この様子だときつと私は弟に好かれていたのだろうか……

「ごめんね……弟のこと忘れてしまうお姉ちゃん……」
でも今はこれしか言うことはできなかつた……

第一話「私のいた世界」

記憶には大まかに2つの種類がある。1つは【思い出の記憶】 私が引き出せない記憶で、家族や親しい人との関係などの記憶である。

【知識の記憶】これは、文字通り知識としての記憶で、物や生物の名前などを記憶したものだ。

ここは、県内の病院の個室で、今は雄二しかない。

「……今はこんな状況かな。」

「ええ、ありがとう雄二、大体は分かったわ。」

雄二に簡単な家族の状況を聞いた。父・風見亮二は、横暴で酒豪、挙句の果てには私を利用して生活している（私の描いた絵画の売却）

母・風見聡子は、雄二に対して無干渉な事が多いが、私が記憶を失い亮二との確執があつてからは雄二の事を気にかけている。

飽きたのは両親とも私を収入源に生活をしていたことだ。私が事実上いなくなつて生活は成り立つのだろうか……

「前の私はどんな私だったのかしら？」

これは、私が質問するか躊躇ためらつていたものだ。弟である雄二が慕たづなってくれているのだから、そこまでひどい姉では無かつたと思うが。

「んーいい姉ちゃんだよ！俺、姉ちゃんより良くないからって比べられていたけど、姉ちゃんはそんなことなかった。いつも俺の事を考えてくれて、優しく、賢かしこくて、いい姉ちゃんだよ」

「いいお姉ちゃんだったのね……」

ああ……聞かなければよかつたかもしれない。きっと私のせいで雄二は、多くの苦悩があつたのだろう……そんな私が生きていてははずれ雄二にまた……

「今だつて姉ちゃんは姉ちゃんだよ。」

「ええ……そうね、ありがとう雄二」

記憶を失つて、雄二を一人にした私に守ってもらう権利なんてあるのだろうか？でも今は雄二の一言一言が私の罪悪感を払拭はらしてくれているような気がした。

「姉ちゃんはいつ退院できるの？」

「そうね、来週には退院できるって先生が言っていたわ。」

退院して自宅療養することになった。まだ動き回れるほど回復していないが日常生活は送れるとのことだ。

「これは私が書いた絵なのかしら？」

「そうだよ、姉ちゃんが最後に書いた絵だね。買い手はもう見つかったみたいだよ。」

「そう……」

この絵には感情が籠っていないのがすぐにわかった、形だけの芸術で機械でも描けるのではないかと思つてしまった。これを書いた私は、どんな気持ちだったのだろうか。

「ここが姉ちゃんと俺の部屋。こつちが姉ちゃんの机ね。ベットは下の段だよ。」

「わかつたわ」

自宅に帰ることで少しでも思い出す切っ掛けになるのではないかと思つていたが、何も思い出すことは出来なかつた……

次の日、桐原という男が家に訪れた。彼は私の絵の買い手を探す仲買人のようだ。

「これはこれは桐原先生どうですか？一姫の絵は高く売れそうですか？」

「ええ、それなりの額は付きましたよ。」

「おお、それはよかつた。さあ、一姫こつちにきて挨拶しなさい。」

「こんにちは、桐原さん」

「やあ一姫、記憶を失つたと聞いたけど絵はまだ描けるのかい？君の絵には多くの人が期待している。私には分からないねえ、こんな絵に金を積む者の考えが」

「……………」

この人は見抜いている。何か近いものがあるのだろうか……

「おや？ 気分を悪くしてしまったかな。そういえば雄二はいるのかい？」

「ええ、雄二来なさい。」

「……………」

「相変わらず無口だね、だけど僕は君のことを気に入っているんだ。そうだお菓子を
持ってきたんだ後でお姉ちゃんと食べてくれ。」

「ありがとう」

「それでは、次の仕事もあるのでね。また絵を描いたら連絡してくれるかな？」

「はい桐原先生、またお願いします。」

彼が帰ると、雄二がホツとしていたようにも思えた。不気味な男だけれども本質を見
抜くことができ、雄二の才能を知っており、賞賛しているように感じられた。

しかし、その考えが間違っていると気付かされるのは後の事だった。

第二話「壊れ行く日常」

「黙れ！お前に何が分かるんだ！お前は俺に従ってればいいんだ。酒だ、もつと酒を持ってこい」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

最近、夜になると聡子に対して亮二が怒鳴り付けているのをよく耳にする。内容は、私が絵を描けないことにあるのだろう。

彼らの収入源は、ほぼ私だったのだから収入源が無くなり借金を作った亮二が荒れるようになったのだ。

ギリギリの均衡を保てなくなり、日常生活の崩壊は止まらない。

「一姫、ちよつとこつちに来い。」

「……はい」

覚悟はしていた。亮二は、使えなくなったものを切り捨てる目をしているのがわかる。

「俺は、お前に期待していた、全てを託した。それなのに、記憶を失った？絵が描けない？どうしろって言うんだ！」

「欲しくもない期待をされて、拳句の果てに切り捨てる。そんな考え間違っているわ……」

「黙れ！俺はお前の父親だぞ。子どもが父親に刃向うな！」

亮二が勢いよく手を振り上げた。

パンツ

見えてる光景が一瞬真つ暗になった。

「一姫い！あなた、やりすぎですよ」

「逆らった罰だ！お前も同じ目に合うか？」

「姉ちゃんは……悪くない」

「なんだ雄二いたのか？聞こえんな。」

「姉ちゃんは悪くない！」

意識が朦朧とする中で雄二の声が聞こえてきた。

雄二……あなたが傷つくことは……

声を出すことが出来なかった。

「お前もか！」

パンツ

聡子が怯えながら言葉を発する。

「あ、あなた、もうやめて……この子たちは何も悪く……ないじゃない！」

それから私の意識はなくなつた。

ただ、聡子が母親ぶつてていることに対して少し反感を覚えたことだけ覚えている。

気付くと私は布団の中にいた。日の高さから考えるにもう夕方だろう。斜めに差し込んでくる夕日が眩しい。

あたりを見回すと横には眠つたのであろう雄二と母の聡子がいる。

ここはどこだろう。ゆっくりと状況を整理していく。こういうときは変に焦らず順を追つて状況把握するのが妥当だ。

まずは時系列。私の記憶では暴走する亮二に殴られたのが午後8時くらいで当たり前だが日は既に沈んでいた。

すると今は少なくとも日付を隔てている。

そしてこの場所。見たことがない部屋だ。あの洋風臭い家とは違うにおいがする。

自宅とは比べ物にならないくらい狭い部屋だが、なぜかとても落ち着く。

雄二と母さんが傍にいるからだろうか。この推察はすぐに否定できた。勿論、亮二がいないからだ。

父親がいない場所のほうが安心できるとは何とも皮肉なものだ。

まあ、私は本来あるべき父親の姿を知らないから何とも言えないが、自分の父が常軌を逸していることは確信を持てた。

よく考えれば私が記憶を失ったらしい時以降、家族全員ゆくり休めなかったものだ。

このように怯えず寝られるのも随分と久しぶりだ。

どこに来たのか分からないが、今はこの二人が起きるのを待つてからこの先のことを考えよう。

「……………」

また少し眠ってしまったようだ。もう既に日が落ちており時計は午後9時を回っていた。

「一姫、起きたわね。雄二も来なさい。」

「母さん、ここはどこなのかしら？」

「私達逃げてきたの、昨日の晩、父さんが酔いつぶれて寝てしまった後、以前から親戚といざという時は逃げるための準備をしていたの。それで狭いけどこの空き家を貸してもらってるわ。」

「父さんには、ばれてないよね？」

「ええ、大丈夫よ雄二。もうあの人は、ここには来ないわ。」

夜逃げして以来、聡子は、家計のために缶詰工場で働くことになった。最近では、スナックでも働き始めたようだ。雄二は学校に通っているが、私は体調のこともあり、家に残るようにした。慎ましいながらも平穩で幸せな生活に感じられた。

いつものように雄二の見送りをした時に、近所の主婦たちの会話が聞こえてきた。

「風見さん、夫に追われて夜逃げしてきたらしいわよ。」

「あら怖いこと、どちらが悪かったんでしょね。」

世間の目とは残酷なものだ。実際に身の回りで起きていることも、他人の事なら軽々しく思えてしまう。当事者にならなければ分からないくせに……

「私のせいで二人は……」

雄二には、私のせいでは無いと言われているが、どうしても考えてしまう。私が不幸にしている。その罪悪感が付き纏ってしまい、悲觀的になってしまうのだ……

その日の夕方、母さんがスナックに出かけようとした時にその男は現れた。

「やっと思つけた、もう逃がさないからな」

風見亮二である。一年もの間、ずっと探し続けていたのだろうか。

「こんな所に住んでいたとはな、おかげで探すのに苦労したんだ。」

「あなた……」

「今更来てどうするんだ！母さんも、姉ちゃんも辛かったんだ。もう出て行つてくれ！」
「ガキは黙つてろ！」

亮二は雄二を突き飛ばした。仄かに酒の臭いがする。酔っているようだ。

「雄二！」

「大丈夫だよ、母さん」

「私達の所に来ないで……」

「一姫、お前もか！ガキがいると話にならん、雄二、一姫、酒を買つて来い。強い奴だ。」

「雄二、一姫、行つてきて……ここは私が話をするから。」

「で、でも……」

「行くわよ……雄二」

母さんは、きつと私達を巻き込みたくないのだ。時間が経てば亮二も酔いが覚めて帰つていくと踏んでいるのだろう。だから今は雄二を連れて……

家を出るとドア越しに母さんの悲鳴が聞こえてきた。

「助けなきや……」

「雄二……今は母さんに任せましょう。」

「分かつてるでも助けないと……母さんが！」

「そう言うと雄二は戻ろうとしたが私は腕を掴んで止めた。

「ダメ……雄二まで行ってしまったら、雄二も母さんも……」

「ごめん、姉ちゃん。」

「待つて、行かないで、雄二いいいい……」

私は懸命に雄二の後を追いかけて、結局部屋まで戻った。亮二が聡子に馬乗りになっているのが雄二の頭の横に見えた。

その後はよく覚えていない。気が付くと目の前には、血を流している亮二と、顔中痣だらけの母さんと、そして血の付いた包丁を握った雄二がいた。

「雄二……？」

「姉ちゃん……ごめん」

「いいの、それより母さんこれは……」

「いい？二人ともよく聞いてね。この袋に全財産があるわ。これを持つてどこでもいいから逃げなさい。後は母さんが何とかするわ。一姫、お姉ちゃんとして雄二のことをお願いね……」

「母さんも一緒に行こうよ。」

「ごめんね雄二……母さん疲れちゃった。少し休ませて頂戴。」

「……雄二行きましょう……」

「姉ちゃん……」

「ごめんね……雄二……一姫……」

私はこの後どうなるかは、見当が付いてしまった……しかし今それを話すことは出来なかった。

私達は、家を出た。そして駅に向かう途中で救急車が横ぎった。

「戻らないと……母さんが……母さんが……」

「雄二……」

「姉ちゃん、ダメだ！母さんは見捨てられない。俺が父さんを殺したんだ……母さんは悪くないんだ。だから戻らせて。」

「雄二……」

私は、雄二の目を見ることができなかった。余りにも痛々しく今にも大切なものが壊れてしまう寸前のような目をしていて。私はそれに気圧けおされ家の前まで戻ってきていた。

家の前には救急車とパトカーが止まっており人集りが出来ていた。

「雄二い！」

私が叫んだ頃には雄二はドアへと走り出していた。警察官に止められたが雄二はそれを振り払って向かった。私も急いで後を追った。

「そんな……そんな……ああああああ……」

ドアの向こうには血だらけになった亮二の隣で首を吊った聡子がいた。それを見た雄二は、ショックのせいか気絶してしまった。

その後、雄二は病院に運ばれ私も同行することになった。

「私は……」

何を考えていたのだろうか……この壊れてしまった日常で……私は……

第三話 「闇夜の中で」

「……………」

目を覚ますと雄二が手を握っていてくれた。

「雄二、体調は大丈夫？」

「うん、それより姉ちゃん俺は……………」

雄二が何か言おうとした時、病室に桐原が入ってきた。

「やあ2人とも、事件の事を聞いてね行く宛てが無いんだろ？なら私の屋敷に来るといい。」

「あの…………桐原さん私達は……………」

「ん？何か不満でもあるのかな？両親を失った君たちには持って来いの話しだと思っけどね。」

確かにそうだ…………まだ子どもである私達だけで生活するのは限界がある。桐原は雄二の事を気に入っている…………雄二が傷付くこともない。

「姉ちゃん……………」

「桐原さんにお世話になりました。私達だけで生きていくのは困難だわ…………桐原さん

よろしくお願いします。」

「それは良かった。雄二、明日には退院できるようだね？また明日迎えにくるよ。」

「はい……」

「それでは、また明日。」

そう言い残して桐原は病室を去って行った。

翌日、私達は、海外にある桐原の屋敷に行った。古風な屋敷で私達2人が増えても問題無い広さだ。

「ここが雄二の部屋、こっちが一姫の部屋だ。」

案内された部屋は、1人で使うには広すぎるくらいだった。

桐原の屋敷での生活は、不自由では無かった。桐原は本が好きなのか多くの日本語の本を持ってきてくれた。また私は桐原のチェスに付き合うこともあった。

「いやあ、さすがに一姫は強いねえ」

「桐原さんこそお強いですよ。」

「はは、一姫にそう言っただけで貰えると嬉しいな。」

桐原……分からない。何か企んでいるのか、それとも私の考え過ぎなのか。でも今はこの平穏な日々を大切にしないと……平穏が雄二の心の傷を癒してくれると信じて。

働けるようになったら2人で日本に帰って暮らそう。

私が雄二を支えないと……それが今まで私が巻き込んできたことに対する罪滅ぼしになるのなら……

ある日の晩、私は寝付けなかつたので少し屋敷を歩くことにした。桐原には、深夜に部屋から出ることは禁じられているが部屋を出ることにした。

「雄二、いいねえ、君は最高だよ」

桐原の部屋のドアが少し開いており、そこから雄二と呼ぶ桐原の声がしたので覗き込むと驚愕の光景が目に入ってきたのだ。

「やはり、雄二には女の子の服が似合う。それに君の瞳は最高だ。全てを否定し拒絶する。最高だよ雄二い！」

「……………」

「そうそう、その無口な所もいい。まるでお人形さんのようだ。一生可愛がつてあげるからね。」

桐原が雄二の事を気に入っていたのは知っていたが、これは異常な事だと分かった。桐原は、雄二の事を愛玩動物としか思っていないのだ。私の判断は間違えだったのだ……もつとすぐに桐原の異常さに気付いていれば……

そつとその場から立ち去ろうとしたときに、桐原に見られてるような気がしたが気のせいだと思った。

その翌朝、昨晚の事もあり眠ることが出来なかつた私は、先に朝食が用意されている食堂のある一階へ向かうことにした。

「まさか、あんなことがあつたなんて……私はどうしたら……」

そう呟きながら階段を下りているときだった。

ドンツ

誰かに後ろから突き飛ばされた。咄嗟に階段の手すりに手を伸ばそうとしたが、押された勢いが強く掴むことが出来ずに、私は階段を転げ落ちていった。

「大丈夫かい一姫？早く救急車を呼ぶんだ。」

「姉ちゃん！しつかりして、姉ちゃん！」

桐原の起こりうる事を知っていたかのような作つた演技の声と私を必死に呼びかけている雄二の声が聞こえてきた。

ああ……意識が遠のいていくのがわかる。私が雄二を支えていくと決めたのに……

雄二……

遠ざかる意識の中で私の脳内にはある一つの言葉が浮かんできた。

『死』

今の私には魔法の言葉であるように感じられた。『死』を受け入れさえすれば、もう誰も巻き込むこともない……そう、私がいなければ雄二は不幸になることは無かつたのだ。きつと雄二だつて心の中では私を恨んでいるのだろう。

日常を壊し……家族を壊し……記憶を無くした私は雄二への愛情すらも自ら壊したのだから……

もう何も壊したくない……失うだけの人生なんて終わつた方が……

『まだ、地獄ではない。まだ、生き残る価値のある世界だわ……』

誰だろう……でも私はもう……その生き残る価値がわからないわ……

第四話「人の形」

「姉ちゃん……姉ちゃん……」

姉ちゃんが階段から落ちてから3日経過した。桐原によるとまだ意識が戻っていないそうだ。姉ちゃん……姉ちゃんがないと俺は……

「また一姫の事かい？大丈夫だよ雄二、無事でいてくれるさ。」

「俺は姉ちゃんの隣で生きてきた……姉ちゃんの言う事は正しかった。両親が死んでから姉ちゃんは絶対だった。俺はどうすれば……」

「んー私からさせてもらおうと、それは自分の存在を認める人がいない、ということなのかな？」

「……」

すぐに否定しようと思ったが言葉が出なかった、桐原の言っていることは正しい……俺は、認めてもらいたいのだ。父親の血で汚れてしまい、母親を見捨てることになってしまった自分を……

「それは……」

「大丈夫、分かっているよ雄二。君は辛い思いをたくさんしてきた、でもね雄二、それは

君の才能が開花するためだだよ。」

「才……能？」

桐原は何を言っているのだろうか。才能が開花？俺には何も取り柄が無いのに……

「まあ、気付かないのは無理ないね。簡潔に言うと『人殺しの才能』だ。」

「人殺しの才能……俺は殺したくて殺したんじゃないんだ……」

「普通の人間には分からない才能だろうね。普通の人間はこのことを才能以前に異常なことだと思ってしまう。だけど私たちは。普通じゃないんだよ雄二。」

「普通じゃない……」

桐原の言う通り異常者なのかもしれない。

「そう普通じゃない。でもそれは悪い事だけでは無い。力は使いようだ。雄二、君は今ダイヤの原石のようだ。価値があるのは分かっているが磨かれていないから評価されない、勿体ないね雄二。」

桐原の言葉には、どこか一姫と似たような、理屈の通っている言葉のように聞こえてきた。姉ちゃんが俺を認めてくれたように、形は違えど認めてくれていたので……

「この才能は、人を殺すことなんだろう？人を殺すのは悪い事だ……守ることもできない愚かな力だ……」

「違うね、雄二。殺せる事で守れる事もあるんだよ。奪われる前に相手を仕留める。正

義の鉄槌だ。だから愚かでもない誇れる力なんだよ。」

誇れる力……この俺に？ありえるのか？守れるのか？一姫を……

「雄二、君は強くなれる、みんなを守るくらいにね。私は応援したいんだ。その為にもいい施設を紹介しようと思うんだけど、どうする雄二？」

強くなれる……弱いだけの……認めてもらうだけの俺じゃない……力が欲しい……

「行きます。強くなるんだ……」

「いいね雄二！手続きはできてるから明日にでも行こうか。」

「はい……」

翌朝、桐原に連れられて訓練所のような施設に行った。山間部にあり、とても広い施設だ。

「おお、オスロさん。今日は見学ですか？」

「違うよ、今日はこの子を連れてきたんだ。私のお気に入りだね。」

「そうでしたか！どうぞ見ていってください」

「そうさせてもらおうよ」

「オスロ……？」

「ああ、雄二には、まだ言ってなかったね。桐原は日本での名前で、海外ではヒース・オ

スロという名前なんだよ。さあ、こっちだよ雄二」

「俺が教官兼ここの管理をしているマイクだ。」

ジョンは身長は190cmはあるほど大きく、サングラスを掛けたごつい男だ。

「よろしく願います……」

「それじゃあジョンよろしくね。仕上がり次第引き取りに来るから。頑張つてね雄二。」

「はい」

この施設では、銃の解体や扱い方、体術、暗殺術、様々なことを学んだ。訓練が終わると栄養剤と言われているものを注射器で入れられていたが、それが薬であったことに気付くころには体は毒されていた。

自分でも自分というものが破滅へと近づいてるようにも感じたが、次第にそれは薄れていき、むしろ今では自分自身が洗練されていくような感じがした。

「俺は強くなれる」

強くなっていく自分の中で、誰かを守るために強くなるという目的意識は無くなり、ただ強さを求めるようになっていった……

時は流れ、卒業試験の日がやってきた。

「それでは今から卒業試験を始めようか。ルールは簡単、相手を殺した方が卒業だ。」

オスロの出した卒業試験の内容は、妥当なものだと思っていた。弱者は知らない強者だけが全てなのだ。

「次、雄二、〇〇〇」

俺の番だ。容赦はいらぬ、ただ相手を殺すだけだ……

一瞬の出来事だった、ただ相手が倒れているのを見て、殺したことはわかった。

「合格だ、雄二」

「さすがだよ雄二、君は強くなったんだよ！」

強くなった……弱い俺はもういない……でもなぜ俺はこんなに強さを求めていたのだろうか……

オスロの屋敷に帰ることになった前の晩に変な夢を見た。

「雄二………いかないで、雄二………」

とても見覚えのあるような少女であったが思い出すことができなかった……